

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 宮崎大学教職大学院・宮崎県教育委員会教職員課・宮崎県教育研修センター・宮崎県公立小中学校事務研究会
	事業名： 学校事務への理解を深めて「チーム学校」に繋げる
	研修等名：【NITS・宮崎大学教職大学院コラボ研修】 学校事務への理解を深めて「チーム学校」に繋げる研修 —知っていますか？学校事務の仕事—
	開催日時：令和 7 年 2 月 10 日 13 時～16 時 開催場所：宮崎大学教育学部 7 階講義室（宮崎県宮崎市学園木花台西 1-1） 参加人数（総数）と参加者の属性：（54 人）教育委員会教職員課 1 人、教育研修センター1 人、大学教員 6 人、院生 20 人、学部生 13 人、宮崎県公立小中学校事務研究会 13 人、

目的：

本事業では 2015 年の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」により登場した「チームとしての学校」（以降、「チーム学校」と略記）を念頭にしている。同答申では、「チーム学校」が必要な理由について、「心理や福祉等の専門スタッフの参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補い、教育活動を充実していくことが期待できる」としている。ただし、構成員については「心理や福祉等の専門スタッフ」と表記しており、あたかも SC と SSW に限定しているかのような印象を与えているが、「心理や福祉」の後に「等」がついているように学校教育に関わり得る専門スタッフは、多岐にわたっている。養護教諭、栄養教諭、ALT、部活動支援員、スクールサポーター、ビオトープ管理員など多くの専門スタッフがいるが、とりわけ学校事務職員は、学校経営を展開するうえで欠かせない存在である。しかしながら、大学の教職課程において学校事務職の説明が少ないため、多くの新任教員にとっては、赴任先の学校で初めて学校事務職員と出会い、学校事務職の存在を知ることになる。これでは、教諭と学校事務職員とが連携・協働する前に、お互いを理解し合うことから始める必要があり、学校経営上の観点から見ても効率が良いとは言えない状況である。そこで、本事業では、「チーム学校」の構成員について、教諭と学校事務職員とを含めた態様を想定した上で、教職大学院院生が学校事務職への理解を高めるための契機を提供することを目的としている。

内容：

まず前半に企画者からの趣旨説明（湯田）、次に宮崎県教育委員会事務局教職員課人材育成担当副主幹から「教員の働き方改革」の現状を説明していただいてから、宮崎県公立小中学校事務研究会の協力のもと、同研究会の会長に学校事務の現状（学校事務員の一日）を説明していただいた。

後半は、学校事務に対する教職課程受講生の意識調査の結果をもとにしつつ、学校事務に関する重要項目と教員が学校事務に求める事例をまとめた研修ノートを活用したケースメソッドを実施することで、相互理解を深める。ケースメソッドでは、研修ノートに掲載された 3 つの事例のうち 2 つを選択してグループ内で討論した。その際に、宮崎県公立小中学校事務研究会の会長と副会長、教職員課副主幹、県の教育研修センター学習研修課教科等指導力向上研修担当がアドバイザー役として、各グループに 1 名ずつ加わった。さらに参加者が連携を推進するための方途を探究し、グループ単位で成果を発表することで情報共有ができるようにした。

成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

ケースメソッドでは、4 つの全グループで議論が大変活発になされた。アドバイザー役からは難解な専門用語の補足説明と学校現場での現状説明がなされたことで、大学院生のうちストレート院生が現場の知見を得ることができたと回答した。また、ケースメソッドで使用した研修ノートでは、ストレート院生にとって初見であろう学校事務に関する事項の補足説明を記載しており、ケースメソッドでの討論で研修ノートが大いに活用されていた。

参加者による事後アンケートでは、ほぼ全員が今回の企画に大変満足したと回答した。大変満足以外を記入した 2 人についても、研修企画自体の否定ではなく、アドバイザー役の人選の更なる多様化を望むものであった。

宮崎県公立小中学校事務研究会の会長および副会長からは、将来の教諭と学校事務職員との交流の場になったとの評価を受けた。宮崎県教育研修センターの主幹からは、本企画を今後の行政研修の新しいコンテンツとして位置付けたいとの評価も受けた。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本研修により、「研修デザインの三角形」の構図において「主語」となる教職大学院生と学校事務職員が、お互いの職務に気付くことで、相互理解を深める契機となった。今後の行政研修において教諭と学校事務職員との混合形態が有効であることが分かった。研修ノート制作も初めての試みであったが、専門用語の補足説明を掲載することで共通理解が得やすくなる効果があった。研修ノート掲載のケースメソッドを通じて、教職大学院生は、日々の教育実践が学校事務によって支えられていることに「気付」き、教職大学院での学びと学校事務を関連付けて、より良き教育実践に向けた連携の在り方を「探究」することができた。

アイデアや工夫したこと：

グループワークが可能な教職大学院講義室において、講義・ケースメソッド・発表の流れで実施した。

講義では、宮崎県公立小中学校学校事務研究会の会長による「学校事務職員の日」がとてもわかりやすく、相互理解を深めるのに役立った。

ケースメソッドでは、研修ノートを制作して使用した。ショートサイズの3つの事例を掲載していたが、1時間弱の検討時間では、ショートサイズの事例を2つこなすことができた。2つこなすことで、発表会での比較検討が円滑にできた。

ケースメソッドでは、テーブルトップ型ポストイットをしようすることで、作業効率が高まり、発表の際も検討項目が見やすくなった。さらにポストイット用のサインペンを使用したことで、視認性が高まったことも付記する。



花房主幹の講義



児玉会長の講義



ケースメソッドの様子



ケースメソッドでの
討論内容の発表